

2025(令和7)年度 自己評価・学校関係者評価書

学校法人スピノラ学園 幼稚園型認定こども園 双百合幼稚園

1 教育目標

目標～神さまに愛されていることに気付き、神さまと共に歩む子ども

☆自分で考え 行動できる子ども

☆元気に活動する たくましい子ども

☆心情豊かな子ども

2 本年度の重点課題

1 幼小のスムーズな接続を図るため、小学校や地域の交流を行う。

2 保育の系統性をもった活動の計画をたて、それを各職員間で共通認識として共有する。

3 「全体的な計画」の「重点的に取り組む教育の柱」参照

3 評価項目の達成及び取り組み状況(教員 18 名)

◆a;十分達成されている、b;達成されている、c;取り組まれているが成果が十分でない、
d;取り組みが不十分 ※%は小数点第1位を四捨五入の為100%超の場合有

◆評定A;自己評価 a・b が 80%以上、B;a・b が 60%以上、C;a・b が 60%未満

	評価項目	評価内容	評価	集計	%	評定
1	キリスト教 保育	・朝礼・食事・降園時の祈りや、宗教行事を通して、「双百合の4つの心」について考えることができたか。 ・日々の生活や「宗教の時間」を通して、職員自身が神さまの愛を感じ、理解を深めていく努力が出来たか。	a	4	22	A
			b	13	72	
			c	1	6	
			d	0	0	
2	教育課程の 編成・実施 及び特色の ある教育の 推進	・年間指導計画や月カリキュラムを作成し、学年毎に毎月の評価・改善を図ったか。 ・園地の環境を活かした教育活動を進めるとともに、食育の推進や ICT 教育の理解に努めたか。	a	1	6	C
			b	8	44	
			c	9	50	
			d	0	0	
3	保育の計 画性	・発達段階に合わせた教材選びやテーマを定めた系統性のある保育を計画し、導入や内容にも専門性をもって工夫に努めたか。 ・ねらいに沿った保育内容の計画と、子どもの状況に応じた臨機応変な対応をバランス良くとることができたか。	a	2	11	A
			b	13	72	
			c	3	17	
			d	0	0	
4	保育のあ り方 幼児への 対応	・個々の傾向や特徴を把握し、配慮や援助が必要な子どもの情報を、教職員、各機関、保護者との間で共有することができたか。 ・子どもへの対応について、学年や多くの教職員で共通理解しながら進めるよう努めたか。	a	4	22	A
			b	13	72	
			c	1	6	
			d	0	0	

5	安全への配慮	<p>・安全教育年間計画に基づき、危機管理マニュアルを作成し、救命救急講習を受講するなど意識を高めたか。</p> <p>・毎月の訓練や点検で、安全への意識を高め、具体的な行動をとれるよう努めたか。</p>	a	5	28	A
			b	10	56	
			c	3	17	
			d	0	0	
6	健康管理	<p>・保健計画に基づき、手洗い・うがいの習慣化など基本的な生活習慣を養うよう努めたか。</p> <p>・食物アレルギー等の健康管理を保護者や給食業者等と連絡を取りながら進めたか。</p>	a	10	56	A
			b	8	44	
			c	0	0	
			d	0	0	
7	幼少の接続	<p>・小学校生活に安心感と期待感を得られるような活動を取り入れるなどして、円滑な接続を意識したか。</p> <p>・小学校との学びの接続を図るにあたり、小学校の教育内容(スタートカリキュラムなど)の理解に努めたか</p>	a	1	6	C
			b	8	44	
			c	6	33	
			d	3	17	
8	教師の専門性と資質の向上	<p>・園内研修会を計画的に行い、更に外部研修の成果報告等により情報交換ができたか。</p> <p>・専門家(カウンセラーなど)による教育相談や子ども支援の研修により、児童理解を深めることができたか。</p>	a	1	6	B
			b	13	72	
			c	4	22	
			d	0	0	
9	保護者や地域への対応	<p>・保護者には丁寧、誠実に対応し、日常の電話や定期的個人懇談等で相互理解に努めたか。</p> <p>・地域の方との交流の機会をもち、出来ることをすることによって、地域貢献を図ったか</p>	a	6	33	A
			b	11	61	
			c	1	6	
			d	0	0	

4 達成状況について(自由記述)

◇保育について

- ・年度初めの職員研修で話し合った目標について考えながら進むことができた。
- ・「ふたゆり万博」や「だんじりづくり」など子どもたちの興味や関心に沿って活動の計画を立てられた。
- ・園地(裏山)を活用した保育に積極性が出てきた。
- ・特色のある教育の推進については、園地の活用はできたものの、食育とICT教育に自発性がない。
- ・学年に応じた健康指導(手洗いの習慣)、食育(行事メニューの解説)などができたと思う。
- ・全体的におおよその項目は達成できていると感じるし、達成するための工夫がされていることが多い。
- ・保育の計画性について経験不足により改善点が多いと感じた。
- ・保護者への対応は胸を張れる。どの保育者も保護者に寄り添い、丁寧に関わっている。
- ・インクルーシブな自由保育などができ、子どもの「やってみたい」を引き出すことができた。クラスでの保育に取り入れるなども意識しながら、今後もより広げていきたい。

◇幼小接続について

- ・保育者が幼小接続の意識を持つようになったので、子ども自身も意識できるように計画した。
- ・小学校や近隣施設との交流、文化祭への出展などを通して校区の園として地域貢献を模索している。
- ・もっと他に交流する手段はないかを考え、より幼小連携ができたと思う。

◇宗教について

- ・自分自身でわかっていないことが多いが、他の先生の話聞いてやってみようと思うことが多かった。
- ・職員宗教の中でキリスト教保育について改めて考える機会がある。
- ・日々の保育で特別に意識することが出来なかったので反省点である。
- ・自分がまず神さまを常に想って生活することを意識した。手を合わせるが多くなった。

◇その他

- ・少しずつ保育の質の向上に向けて進んでいると思う。
- ・園内研修は達成率が伸びたと感じる。共有することの大切さを改めて感じる事ができた。
- ・保育者間で子どもの情報や関わりについて共有することができた。

5 今後の課題について(自由記述)

◇保育などについて

- ・食育や ICT 教育はあまり取り組めていないと感じる。育てている野菜の世話やクッキング、絵本や紙芝居などを使って食の大切さを伝えていく。乳児クラスでもできる簡単な菜園などを考える。
- ・取り組みは出来ているが成果が出ていない項目が多いので、成果を出せるようにしたい。
- ・自然遊び場プロジェクトを推進していく。まずは子どもたちと「不思議」を体験したい。
- ・年齢に応じた導入を学ぶ必要がある。
- ・忙しい中ではあるが、評価・改善の大切さを職員で共有し、保育の質を高めていきたい。
- ・見直す活動と、より深めていくべき活動の整理を進め、子どもたちにとって負担とならない保育ができるよう、保育の進め方や時間の使い方を考える。
- ・子どもたち自らタブレットなどを使って知りたいこと(折り紙の折り方やけん玉のコツなど)を調べられる環境作りができたと思う。
- ・異年齢交流についてはやはり保育者主導できっかけ作りをする必要がある。方法を考える。
- ・保育の計画性が課題である。
- ・乳児の段階から幼小接続を見据えるために、園内研修などで理解を深めたい。
- ・防災や防犯の観点からも地域との関わりが必要。
- ・安全管理について、救命処置だけでなく緊急時対応フローを各保育室に貼るなど意識を高めたい。
- ・季節の活動を意識的に取り入れたい。
- ・子どもたちと良書(絵本)にじっくり向き合い、ゆったりとした時間の中でお話の世界に入り込める時間と空間の確保を考えたい。
- ・個別支援について、成功事例を保育者間で共有することを意識した。非常勤職員も含めてどんどん伝え合えるように発信力を高める必要がある。
- ・保育者間の情報共有の方法について試行錯誤を行った。共有の時間は確保できたが、欲しい情報が保育者によって違うため、共有する情報の内容を精査する必要がある。

◇宗教について

- ・乳児クラスにおけるキリスト教保育の難しさがあるが、絵本や聖歌など身近なことから神さまの存在を知らせていきたい。

6 学校関係者評価

◆保育について

- ・時代の流れに沿って柔軟に保育ができていると思う。
- ・職員研修、職員対象の宗教の時間、保育者間の共有など、保育の質を上げるために学ぼうとする姿が園全体に感じられる。
- ・幼小連携を深めていく取り組みは、定例行事として交流が増えるといい。
- ・裏山の活動や異年齢交流はふたゆりの特色としてこれからも続けてほしい。
- ・C評価になっている項目について、畑や裏山の自然があるので、食育の推進など続けて欲しい。
- ・事務所前の生き物コーナーが子どもの情操教育に役に立っている。送迎の家族にとってもよい学びとなっているので、今後も活用して欲しい。
- ・先生たちの様子から、PDCAを丁寧に行っていることが見受けられる。
- ・「ふたゆり万博」は子どもたちの興味に合わせた環境を整え、色々なアプローチがあったことで子どもたちによるイメージの広がりがあった。その時だけでない日々の保育の積み重ねを大切にされているふたゆりの良さが発揮されていた。
- ・様々な課題にチームで取り組んでいる姿勢がいい。
- ・先生達の子どもたちへの言葉かけが温かいと感じる。
- ・C評価の項目について、ICT教育の難しさを感じる。少なくともメリット(便利さ)とデメリット(ネットの危険性)を感じるようになってほしい。
- ・幼小接続の課題については、地域的な問題も含まれる。和泉市と岸和田市で幼小の連携に対しての姿勢が違っているので、園単独の解決は難しいであろう。
- ・結果全体をみて、「十分に達成されている」割合が昨年度と比較して減少している点が気になる。
- ・キリスト教保育については、保育者によって差があると感じる。
- ・作物の水やりなどを通して食育に力を注いでいたし、裏山活用は昨年よりも多かったように感じる。ふたゆりの特色として、良い部分だと思う。
- ・「ふたゆり万博」「だんじりづくり」は子どもたちにとってよい機会・経験となった。1学期だけでなく継続して理解を深めようとしているのが音楽発表会でわかった。

◆その他

- ・行事と参観を見学したが、どの行事も子どもの発達段階を考え、努力は必要だが無理に高度すぎない発表で好感が持てた。
- ・運動会の観覧方法(入れ替わり制)は保護者の中で浸透してきてスムーズだった。
- ・フリー参観は2日間の日程を取ることで、活動内容を事前に知らせてくれたことで、保護者が目的(我が子のどんな様子が見たいか)をもって参加することができた。
- ・職員の配置に安心感がある(人数が比較的足りている)。
- ・職員がまとまっていると感じる。
- ・よりよい取り組みが、職員の過重な負担にならないように願う。
- ・剣道指導に工夫がされることによって子どもたちの取り組む姿勢が大きく変わった。
- ・インスタを活用した発信が、外部へ魅力的に伝わっていることが嬉しい。
- ・以前より園歌の手話を忘れている子が多いと感じる。
- ・「教師の専門性と資質の向上」の改善を期待する。
- ・砂場横のジャバラ門にフックがついたり、玄関が全開でなくなったことで防犯対策が強化された。

2025年度 自己評価集計結果考察

1 キリスト教保育

職員宗教の時間が保育者にとって、キリスト教保育について考えるよい機会となり、学びに繋がっている。それに伴い、今年度の目標であった、「保育者それぞれの内に神さまを感じる」ことを意識している保育者が増えた。子どもたちへの言葉かけの中に神さまが宿っていると感じることも多くなった。

2 教育課程の編成・実施及び特色のある教育の推進

園地の活用やインクルーシブな保育は計画的に実行することができたと評価する一方で、食育やICT教育の活動は積極性が不足し、成果が現れていないと評価した者が多かった。また、保育内容の評価や検証も、牽引役や事例などを示さないままではなかなか進まない。リーダーシップをとりながら保育を展開していけるミドルリーダー養成と、各保育者の自発的な保育の計画力向上が課題である。

3 保育の計画性

若手とベテランの自己評価の差が大きいと推測する。今年度は子どもの様子や社会の出来事に合わせて充実した保育が実施できたと感じるベテランと、そこから学びながら試行錯誤する若手とでは、保育の達成感が違ったと考えられる。臨機応変な対応力と保育の計画性をバランス良く発揮する力が必要。

4 保育のあり方 幼児への対応

今年度は、あらゆる情報を職員間で共有しあって、チームで子どもの育ちを支えることが重点目標であったため、情報共有の仕方について試行錯誤をした。少しの時間を利用して、クラス単位の打ち合わせや研修で学んだことの共有をした。共有の大切さを実感した保育者が多かったことが結果に表れている。

5 安全への配慮

Bに近いA評価であった。毎月の避難訓練で、あらゆる状況をシミュレーションしたことにより、自園の問題点や課題に気が付いたことも要因と思われる。今後ひとつひとつを改善しつつ、避難訓練もより多様な状況を想定して実施していく必要がある。

6 健康管理

最もA評価が多かった項目である。健康管理については、学年によって目標が段階的に変わってくるものであるが、特に年長組においては自己管理ができるようになることが最終目標である。それは、乳児の時から積み重ねが結果に繋がると言えるため、全学年で意識できていると言える。

7 幼少の接続

コロナ禍で停滞していた幼小交流を、昨年度から本格的に再開したことで、交流やカリキュラムの作成は進んでいる。しかし年長を中心に行っているため、他学年の保育者の意識はまだ不安定である。全学年の保育者が、日頃の保育やカリキュラムが卒園後、どこにつながっていくのか理解する必要がある。

8 教師の専門性と資質の向上

昨年度は一気にA評価へと上がったが、今年度はB評価となった。キンダーカウンセラーによる研修や、受講した研修の報告会などは継続して行っており、有益な研修は受講しているが、そこで何を学んだか、また、いかにその学びを実践したかは各保育者の個人差がある。保育者の本項目に対する意識レベルが昨年度より一段上がり、評価のポイントが次のフェーズに入ったと思われる。

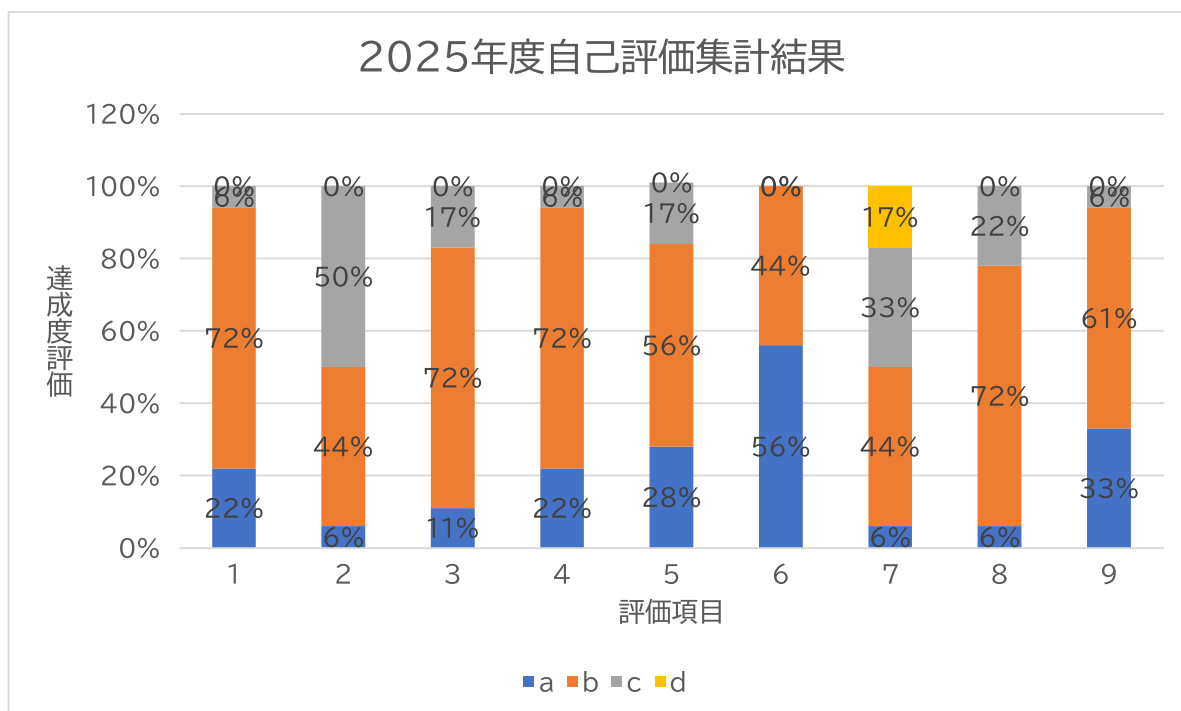
9 保護者や地域への対応

本項目もab合わせると94%と高評価である。保護者への対応には誠心誠意取り組んでおり、日々心を寄せている。また、地域に貢献するために出来ることは何かと、本園の役割をあらためて見出す作業を通して、防災や地域の行事参加について具体的に計画をしつつ、実施できたことが大きな進歩である。

(まとめ)

幼小接続については、和泉市の小学校も今年度になって本格的に始動したため、連携がしやすくなった。ただし園内の取り組みが未だ年長児のみにとどまっているため、全学年の保育者に幼小接続の理解を促す必要がある。子どもが自発的に活動できる環境作りとインクルーシブな保育についての理解は徐々に進み、具体的な保育内容を保育者自ら計画する力がついてきたと思われる。更に子どもの興味に沿った活動を企画し、導入の工夫や子どもたちによる発展が行われることによって、ねらいにアプローチできるような系統性のある計画が立てられるようになることが次なる目標となる。また、情報共有の方法については引き続きIT等を活用しながら、働き方の改善と保育の質の向上の両立を目指す。

私たちの日々の保育は、取り組む内容や子どもの様子によってある程度の評価・考察はできたとしても、その成果については数年後、数十年後にしか検証が出来ないものである。今年度は個別支援や環境教育など、すぐに結果の出ない保育については、研修や書物、専門家の視点などを通してエビデンスを得て、まずは実践してみても試行錯誤を行った。保育の質の向上によって保育方法の可能性も広がるため、常に保育者自身の学びを促しつつ、チームで共に考えていくスタンスを構築する。そのために、リーダーシップを発揮して学びの実践を牽引するミドルリーダーの育成にも取り組み、その上で、SDGs、食育、ICT教育、さらには絵本の活動についての充実も図っていく。



列1	a	b	c	d
1	22%	72%	6%	0%
2	6%	44%	50%	0%
3	11%	72%	17%	0%
4	22%	72%	6%	0%
5	28%	56%	17%	0%
6	56%	44%	0%	0%
7	6%	44%	33%	17%
8	6%	72%	22%	0%
9	33%	61%	6%	0%